

1 滴垂らす内に ～カラクリ大会出場日誌～

縫野丞

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

初投稿作品です。

至らない点が多々あるかと思いますが、温かい目で見守ってください。

小説家になろうでもマルチ投稿中です。

よろしく願います。

俺と幼馴染のよねんはある日、同じく幼馴染の恵子から宣言された。

「アンタ達はあたしと、カラクリ技能大会に出るのよ！」

この物語は、学生時代に経験した俺たちの3年間の戦いである。

目次

プロローグ	1
第1話	3

プロローグ

「こんのつ、オオバカヤロー!!」

ある快晴の初夏、部室から大声がした。

「まあたやってんなあ、あいつら」

俺は辺りを見回した。

まだ授業が終わった直後ぐらいの時間な為、まだ部室棟には人が殆どいなかった。(今日は授業が午前半日だった為、俺はこの時間に来れた)

「よねやんのアレは、もはや病気の部類だよなあ」

俺はため息をついた。

「後輩の教育に悪いかもなあ。しょうがねえ」

部室のドアを開けて中に入った。

2××年、大和国の伝統技能伝承者数は年々減少の一途を辿っている状態~~で~~、

特にカラクリ人形の継承者数は数人程度という状況だった。

これじやイカン、途絶えてしまうと、カラクリ人形が盛んな猫矢市^{ねこや}・^{うらち}粳市・^{くりゆう}九竜市の3市を中心に、関係省庁及び団体が合同で4年前に始めたのが、「カラクリ技能競技大会の開催」というものだった。

最初は細々とやっていたが、マスコミ等で大々的に宣伝し、現在では企業・大学・高校が参加するイベントとなった。

そして、我が崎橋^{さきばし}技術大学も・・・

・・・1年前・・・

「カラクリ技能競技大会?」

昼休み、俺は蕎麦を啜る手を止め、相手の顔をまじまじと見た。

「そうよ! カラクリ技能競技大会!」

視線の先にいた恵子は、胸を張って答えた。

俺の隣で、よねやんが我関せずで、ラーメンを啜っている。

俺はため息を吐きながら、箸を置いた。

「そのカラクリ技能大会が何だっただけだ？」

「このカラクリ技能競技大会に出場して、優勝するの！」

「なぜ？」

「大学宣伝の為よ！」

我が崎橋大学は、所謂Fランク大学に分類され、入学者数が、緩やかながらも年々減少傾向にあった。

なので、目玉となるような実績を作り、少しでも、入学者数回復に貢献したいというのは、素晴らしい考えなのだが……。

俺は、またため息を吐いた。

「愛しのイケメン事務員様から何か言われたのか？」

すると、恵子はキョドリながら、

「なっ、何の事？」

と、視線を逸らした。

こいつは、事務局のイケメン職員にホの字で、お手製のクッキー等を毎週渡していたりしている。

恵子は視線を戻すと、

「とにかく！ アンタ達はあたしと、これに出るの！ これは確定よ！」

と宣言した。そして、

「単位獲得のために!!」

俺はでかいため息を吐いた。

よねやんが、ラーメンの器を置き、ゲップした。

ああ、そつちか。お付き合いの条件かと思った。

っていうかまだ欲しいのか、単位。

(恵子は、こう見えても学年主席である)

第1話

「申し訳ありませんね、恵子さん。急に呼び出しをかけてしまつて」
「いえ、問題ありません」

ヨネとケンジに宣言する前日の放課後、あたしは^{事務員}プリンスに呼び出された。

プリンス事、エドワード様はこの大学の事務員で、あたしの胸キュンポイントである、「シユツ・サラツ・ピシツ・ニコツ・キラツ」をパーフェクトに揃えている、正に王子様なのだ。

顔が蕩けそうになるが、だらけた姿は見られたくない。応接スペースを出るまで、頑張つて抑える。

「さて、恵子さんと呼んだのは他でもなく、この大学に関わる重要な件であり、4年を除く3人の学年主席の方にはお声をかけています」

あたしだけじゃなかったのか……。ちよつとがっかり。

「ではまず、こちらを^ご覧下さい」

そう言つて渡されたのは、1枚のパンフレット。それは、

「カラクリ技能競技大会……?」

そう、件のカラクリ技能競技大会についての案内だった。

「ご存じの通り、我が大学は、入学者数が減少傾向にあります。なので、注目度の高い所謂、“目玉”を作り、入学者数を回復させたいと我々は考えております」

「その“目玉”が、これですか?」

「になるのではないか、という所ですね」

よくある流れね。落ち目の学校が、ある1つの分野において、目覚ましい活躍をして、華々しく復活する。しかし、今回の件でこの流れは無理。

「カラクリ人形は、芸術品の分類に入る、かなり難易度が高い工芸品であり、私たちが3年やそこらで、製作できるものでは無いと思われませんが?」

パンフレットを見ると、「茶運び人形」、「段返り人形」、「^{ゆみひきどっし}弓曳童子」の3体の人形が、それぞれ競技する形らしい。

茶運び人形はあたしでも知っている有名な人形で、職人さんが作ったものは10万を軽く超える価格がついている。

「ああ、そこは問題ないですよ。この競技は主に、カラクリの技術を判定するものであって、人形にそういった“芸術性”は求めていませんね。あるとすれば、“ユニークさ”、かな？」

「なるほど・・・」

確かにそれなら、出来なくはないかな・・・？ でも、やっぱりちよつとキツそうだなあ・・・。

カラクリの動力にモーター等電気的動力は、禁止。ゼンマイか、鉄球や砂、水の移動による重心移動のみ。本来は水銀の重心移動もあるが危険な為、厳禁とする。

なんとなくわかるけど、動力にモーターが使えないのは、痛い！

「ここからが本題なのです」

エドワード様は姿勢を正して言った。あたしも急いで姿勢を正す。

「恵子さん・・・、カラクリ技能競技大会に出場して頂けませんか？」

「・・・はい!？」

えっ、いきなり!？」